

# 時間建築としての大学博物館

— 間取り、増築、移築、転用をめぐる —

後藤 新治

## はじめに

2つの話題から始めたい。2003年に撮影された西南学院高等学校講堂の写真と2019年4月15日パリ・ノートル＝ダム大聖堂の火災である。

図1は西南学院高等学校と中学校が百道浜校地へ移転を終えた2003年に校舎を北西側から撮影したものだ。これまで高等学校講堂として使用されてきたW. M. ヴォーリズ (William Merrell Vories, 1880-1964) 設計の大正期赤煉瓦建築は東西両方向を鉄筋コンクリートによるモダニズム建築の校舎で貫通され、北からは空中渡り廊下が無遠慮にも迫り、地上では波板屋根の回廊が圍繞する。もちろん筆者は高校キャンパスに何度か足を運び、建物内部にも入った経験がある。しかしいまあらためてこの写真を眺めていると、はじめは巨大なカジュマルの樹根に侵食されたアンコール遺跡を、つぎに歴史様式を引用した1980年代のポストモダン建築を思い浮かべてしまった。これは文化財などの破壊や略奪を意味する一種のヴァンダリズム Vandalism ではないのか？ いや、建物は生きているのだ。時代とともに、その姿を変え、役割を替えながら。時間建築<sup>1</sup>、つまり時とともに生き延び、時がつくる建築として大学博物館を捉え直すことはできないか？ 本稿執筆第一の動機である。

6年前の大聖堂炎上の映像はまだ生々しく私たちの記憶に残っている。この火災によって交差部の屋根や小屋組下の石造ヴォールトなどが全焼した<sup>2</sup>。とりわけ19世紀の建築修復家E. E. ヴィオレ＝ル＝デュク (Eugène Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879) の付加した木造尖塔が炎に包まれて崩れ落ちるシーンには思わず声をあげた。

- 
- 1 加藤耕一『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会、2017年）のタイトル (Architecture in Time) を借用した筆者の造語。本稿執筆の着想はひとえに本書に因っている。記して感謝したい。
  - 2 パリ・ノートル＝ダム大聖堂の火災や再建の歴史に関しては坂野正則編『パリ・ノートル＝ダム大聖堂の伝統と再生 歴史・信仰・空間から考える』（勉誠出版、2021年）を参照。

火災のちょうど1か月前たまたまパリに滞在していた筆者は、足場の組まれた屋根の修復現場をカメラに収めていたからだ（図2）。果たして火災の直後、あの尖塔（図2中央後方）は中世のオリジナルではなく、ヴィオレ＝ル＝デュクが「理想的な状態」に復原した19世紀の「偽物」である云々、といった熟知り顔の意見が飛び交った。火災の2日後には政府が尖塔再建の国際建築コンペを言い出す始末だ。では1163年に着工されたゴシック建築を代表するパリの大聖堂は、どの時点に遡って修復再建されるべきなのか？ここで問題になるのが1964年の「ヴェニス憲章」<sup>3</sup>に端を発する「オーセンティシティ」Authenticity、つまり歴史的な証拠としての文化財が有する「真正な価値」である。これは後に、形態、構造、意匠、材料、技術、環境などの真正性に加え、時間経過の中で蒙る価値を有する改変や付加をも含むとされた。では翻って西南学院旧本館・講堂<sup>4</sup>を大学博物館へと改修した際のオーセンティシティとは何であったのか？本稿執筆第二の動機がここにある。

時間建築としての大学博物館を考えるに先立って、旧本館の間取り（平面図）と東キャンパス建築配置の関係性に注目しながら「大学博物館及び東キャンパス建築年表1916-2024」を作成してみた。これを見ながら予備的考察（1. 時代区分、2. 間取り）の後、本題（3. 増築、4. 移築、5. 転用）へと進みたい。



図1（左）西南学院高等学校講堂 2003年  
（ヴォーリス 2003 n. p.）



図2（右）火災直前の工事中パリ・ノートル＝ダム大聖堂  
（2019年3月14日筆者撮影）

3 「ヴェニス憲章」の全文は以下のICOMOSサイトで閲覧できる。（2024年10月1日確認）  
<https://icomosjapan.org/static/homepage/charter/charter1964.pdf>

4 ヴォーリス建築事務所設計図（1920年）によれば、「本館」はAdministration Building、「講堂」はAuditoriumとなっている（改修報告書2006図面 pp.2-7）。

## 1. 時代区分について

まずは時間建築としての大学博物館の大きな流れを把握したいと思い、1) 機能や所管などの制度的改変と、2) 改築や増築などの構造的改変の2つを考慮して5つの時期に分けてみた。スラッシュ以下のサブタイトルは前者が大学博物館を、後者が東キャンパス建築配置を要約した筆者の言葉である。なお年表中、旧本館・講堂に直接関係する記事には年表左端セルをグレー表示した。

第1期 1921年～1946年：学院と旧制中学部の本館・講堂時代

— 孤高の赤煉瓦／建学の起点

第2期 1947年～1958年：新制高等学校の本館・講堂時代

— 分離の開始／西への増築

第3期 1959年～1983年：新制高等学校の保健室・講堂時代

— 空位と再生／東への増築

第4期 1984年～2003年：新制高等学校の校長室・講堂時代

— 回帰と回遊／〈七堂伽藍〉の完成

第5期 2004年～現在（2024年）：大学博物館（ドージャー記念館）時代

— 保存から転用へ／赤煉瓦の簇生

建学の志に燃える米国南部バプテスト派宣教師 C. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier, 1879-1933）がはじめて百道松原の浜辺に立った時、彼の頭にはすでに将来の講堂を起点とした南北と東西に伸びるキャンパスの軸線が靡げながら描かれていたと思う。ヴォーリズの設計になる竣工したばかりの赤煉瓦一棟は周囲の黒光りする木造瓦葺校舎や林立する松の緑に映え、ひときわ鮮やかに孤高の輝きを放っていたに違いない。その後の軍国主義体制下では御真影や教育勅語を納めた奉安殿を建設するなど戦争遂行の一端をも担うことになる。第1期は創建期から戦中を経て戦後の学制改革までの学院と旧制中学部の本館・講堂の時代である。

第2期は戦後の学制改革で中学校と高等学校が分離し、講堂が名目上高等学校に帰属した時代。この時期を特徴づけるのが講堂に直接接続された鉄筋コンクリート造西校舎の新築、つまり講堂の西への増築である。これは西への流出をも意味し、院長室などの学院の本館機能が西の中央キャンパスへ移転分離したことで、高等学校本館・講堂時代が始まる。

第3期は反対側に東校舎が増築された時代。この東への増築／流出によって、これまで残っていた高等学校の本館機能も新しくできた東校舎1階へと完全に移転した。

大正期赤煉瓦は高度成長期の環境変化に対応できなくなったのである。旧本館には新たに保健室などが入室し、いわば「空位」の時代を迎える。生徒たちの避難所<sup>アジール</sup>ができたという意味で保健室の時代と呼んでもいい。一方創建から半世紀を経たこの頃になると文化財保護が叫ばれ始め、修復や復原など最初の「再生」期を迎える。

第4期はこれまで東校舎1階の母屋を借りていた高等学校本館機能が隣にできた5階建の本館（中央棟）に移転した時代。これにともない講堂1階には校長室と事務室が回帰してくる。講堂はその後次々にできていった隣接する校舎と渡り廊下や回廊で連結され、構造的に一体となることで回遊性も生まれた。いわば高等学校〈七堂伽藍〉の完成である。図1の写真はこの時期の最後に撮られたものだ。

第5期は中高の百道浜移転後、大学に帰属した旧高等学校講堂が改修後「大学博物館（ドージャー記念館）」として生まれ変わった時代。この工事は建物のたんなる保存でも、当初復原を目指した修復でもなく、旧本館・講堂を再利用しながら新たな用途である博物館へと改修する転用を目指した。一方で創立100年を迎える学院には「赤煉瓦」への回顧とオマージュから「鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装」の建物が目立ち始める。

上記の時代区分を念頭に間取りの考察に取り掛かる。

## 2. 間取り<sup>5</sup>について（年表左端にA表示）

竣工以来、時代の要請に合わせて幾度となく変更を余儀なくされてきた旧本館の間取り（部屋割り）。明治維新に始まる教育制度の近代化に即応したその変遷は建物自体の役割や機能の変化のみならず、学院の「お家の事情」をも明かしてくれるのではないか。

竣工前1920年の設計図を見ると院長室や中学部長室などの管理中枢と肩を並べ、北東の一角にゲッセマネ会が広いスペースを与えられているのがわかる。教員室とほぼ互角に渡り合っている。ゲッセマネ会とは1918年に中学部キリスト生徒によって結成されたばかりの宗教活動サークルであるが、クラブ活動の部室としては破格の待遇であると言える。本館創建に込めた院長ドージャーの強い意志と期待の表明にほかならない。

第1期1921年竣工後の間取りはほぼ設計図通りに施工されたようだ。玄関を入っ

---

5 日本建築学会編『建築学用語辞典』（岩波書店、1993年）によると「間取り」とは「floor plan; room layout (1) 住宅における部屋の配置。(2) 住宅における各室への機能の割り当て。古くは、本陣、宿屋などの部屋ごとの宿泊人の割り当てをいった」とある。

て右（東）側が学院事務室でその隣が院長室、左（西）側は中学部長室（会計室）でその奥が教員室、廊下を挟んで玄関の正面が応接室、その左側が前述のゲッセマネ会室、右側が図書室でその隣は宿直室となっていた。設計図にはないが、玄関を入れてすぐ左には右と同じ小窓が設けられ、これは生徒が授業料などを納める会計窓口になっていたようだ。1936年の図面を見ると教員の数が増えたのか職員室が広くなり、玉突き状態で部屋も入れ替わる。ゲッセマネ会室が職員会議室に、応接室が中学部長室に、図書室がゲッセマネ会室へとそれぞれ模様替えした。また院長室北側の物入れを改造して奉安所を設けたのはこの年で、翌1937年には教育勅語と御真影がここに安置された。その後本館の南東側松林中に奉安殿が建設され、院長室の奉安所は戦後改造され書庫として使用された。ゲッセマネ会室は新しくできた西南会館（東キャンパス南西角）へと活動の拠点を移したのか、1940年の部屋割りからは消えている。

第2期1951年に鉄筋コンクリート造西校舎が赤煉瓦本館に接続されると、本館の間取りにも大きな変化がみられた。西側の職員室と会議室を隔てていた廊下の壁が撤去され大部屋となった。この時補強のため新たに鉄骨円柱が設けられたようだ。翌1952年には中央キャンパスに新しい本館（大学1号館）が完成したため、創立以来30年間赤煉瓦本館内で不動の一角を占めていた院長室と事務室が空席となる。院長室のあとには高等学校校長室が入り、赤煉瓦本館は以後高等学校本館・講堂と役割が変わる<sup>6</sup>。

第3期1959年に鉄筋コンクリート造東校舎が本館に接続されると、狭隘となっていた高等学校本館の校長室や教員室など管理部門がこぞって東校舎1階へと移転した。一方これまで別棟にあった保健室（救護室）や宗主任室（ゲッセマネ会室）のほか、体育教員室、ヨルダン社（購買部）が講堂1階に移ってくる。この時西側の旧職員室と旧会議室の大部屋は廊下や隔壁が新設（復活）され再び小部屋に分割された。「空き家」に近かった講堂1階にはその後進路指導室をはじめ、国語・社会科、英語科、数学科の各研究室が入居してきた。女子更衣室が新たに設けられたのもこの時である（ちなみに当時まだ男子校であった高等学校では講堂と東校舎の間に新設された職員用WCが「ジェンダーレス」の男女共用であった<sup>7</sup>）。残りは当直室と作業員控室が占めた。さらに1981年には保健室隣の宗主任室が作業員控室に移転し、隔壁を取り

---

6 豊田佳日子「チャペル下の職員室」『西南学院高等学校広報』35号、2013年4月1日（100頁 p.854）はこの時期（1950年代）の高等学校本館や教員室の様子を活写して興味深い。

7 元西南学院高等学校教諭安部健一氏のご教示による。同氏には移転前の高等学校校舎建策に関する筆者の様々な質問に答えていただき、数々の興味深いお話を伺うことができた。

払うことで手狭であった保健室の面積が2倍近くになった。これまでも中高生徒は講堂（チャペル）の2階3階へは自由に入出入りしていたが、保健室や進路指導室ができたことで1階にも足を運びはじめた。赤煉瓦講堂は一時期社会的抑圧から逃れる生徒たちの隠れ家<sup>アジール</sup>にもなった。

第4期1983年には講堂北側に5階建の高等学校本館（中央棟）が完成したため、これまで講堂1階にあった保健室や進路指導室は、東校舎1階に移っていた職員室や会議室などとともに新しい本館に移転した。ところが校長室と事務室だけは正期赤煉瓦の講堂1階に戻ってくる。これにはおそらく国際的に歴史的建造物の保存と修復を訴えた「ヴェニス憲章」（1964年）などの時代の影響も背景にあったと思う。本館工事と並行して講堂1階の改装も行われ、校長室や事務室のほか聖書科研究室（ゲッセマネ会室）がここに配置された。

第5期2004年の大学博物館開館に向けた改修工事では、できるだけ創建時のオリジナルな間取りに復原することを原則としたため、後世加えられた隔壁や鉄骨円柱は取り除かれるか旧状に復された。その結果創建時のゲッセマネ会室、教員室、中学部長室が一室となり現行の常設展示室に、中央の応接室がドージャー記念室に、図書室が特別展示室に、院長室が館長室に、学院事務室が博物館事務室へとそれぞれ改装された。北側階段下の宿直室は男子トイレに、南側階段下の下足室は初の女子トイレに変わった。大学博物館の開館によって、これまで学院関係者に限られていた入館者層が広く地域社会に開かれたことは言うまでもない。

大正から昭和、平成、令和と百有余年の住人の移り変わりを見届けてきた間取りはたんなる部屋割りを超えて、そこには教育制度の近代化、創設者の理想、軍国主義化と戦争、高度成長期、ジェンダー、社会的抑圧、文化財保護など日々の社会情勢や学内事情の変化が色濃く反映していた。自在に部屋の住人を入れ換えることでそれらを柔軟に受け入れ、時には隔壁で境界線を書き換えながら、間取りは絶えず自己の姿を変えていった。

### 3. 増築<sup>8</sup>について（年表左端にB表示）

筆者は今回ヴォーリズ建築事務所の白水達也氏から情報提供を受けた2つの資料を見て驚いた。1つは一粒社ヴォーリズ建築事務所編『西南学院旧高校講堂 建物調査

---

8 前掲『建築学用語辞典』によると、「増築」とは「extension of building 既存の建物に付加する形で建築工事を行い、全体の床面積が増加すること」とある。

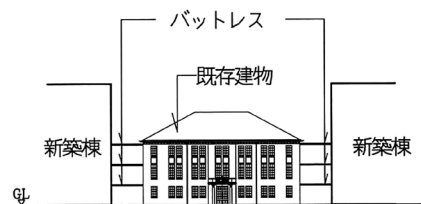
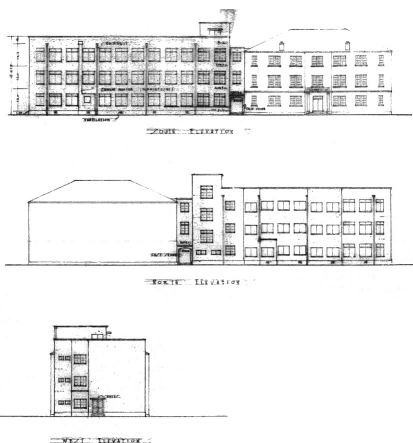


図3 (左) 「耐震補強各案比較表」挿図(子)  
(ヴォーリス 2003 p. 4-42)

図4 (右) 高等学校本館と西校舎 設計図  
上から南立面、北立面、西立面  
1950年(ヴォーリス建築事務所)



及び耐震診断報告書』2003年6月30日(学院史資料センター)の「耐震補強各案比較表」(本誌同氏論文にも収録)に掲載された挿図(図3)、もう1つは「SEINAN GAKUIN JUNIOR HIGH SCHOOL」とタイトルのある1951年に本館に接続された西校舎の設計図(ヴォーリス建築事務所)(図4)である(全図は年表に掲載)。

図3の本館両側を新築棟によってがっしりと補強された耐震モデル図と、図4の1951年に西校舎と接続された本館の図とが全く同じ構造であったからだ。何ということだ。ああ、これは「破壊」ではなく実は「補強」(あるいは「保存」)だったのだ。冒頭でも述べたように筆者は迂闊にも1951年と59年の東西鉄筋コンクリート校舎による本館接続を、1964年の「ヴェニス憲章」採択以前の文化財「保存」意識がまだまだ希薄で、高度成長期特有の再開発的「破壊」行為の一種だと見做していた。早計であった。

さらに驚いたのはこの西校舎増築工事を設計担当したのが他にもないヴォーリス建築事務所自身であり、しかもヴォーリス存命中の出来事なのだ。これはもう「確信犯」である<sup>9</sup>。先の耐震補強比較表を読んでもと本案には「東西両側に強度と剛性を確

9 このことを裏付けるかのような2006年の改修工事報告が以下にある。〔 〕は筆者註。「東・西面の旧校舎〔1951年と59年増築の西校舎と東校舎〕の取り合い部分は、渡り廊下〔バットレス〕のために〔講堂赤煉瓦〕壁の一部が解体撤去されており、また旧校舎建設時と思われるセメントの汚れが酷く残っていた。特に西側では〔赤煉瓦〕外壁の一部を、後に隣接して建てた校舎のコンクリート型枠の代用にしており(……)」(改修報告書 2006 p. 31)

保した棟を新築し、バットレスでつないで煉瓦の崩壊を防止する。新築棟の建築費は少し高くなるが補強費は少ない」とその特徴が述べられている。ゴシック建築などに用いられた「バットレス」Buttress（控壁あるいは扶壁）の用語に納得する（ちなみに図2の手前に写ったアプシスを支える巨大な数本の脚がバットレスで、図1では講堂右側に直結した2・3階部分の繋ぎがそうである）。しかし施工から半世紀を経た2003年の評価によれば、たしかに耐震レベル震度7をクリアするものの、この案は余計な「バットレス」を必要とするため文化財保護の観点から「不可」とされたのは無理もない。

要するに耐震補強を兼ね意図的な改造<sup>10</sup>をさえ目論んだこの増築案は、1950年代なら許容されたかも知れないが、文化遺産のオーセンティシティが厳しく問われる今日ではもはや受け入れ難い方法なのだ。西南学院のように古いヴォーリズ建築を増改築した例は他にないか白水氏に伺ったところ「明治学院礼拝堂（1916年竣工）が東西両袖廊を増築（1930～31年）した例はあるが、左右両側を鉄筋コンクリート校舎で繋げた旧本館・講堂レベルの建物となると他には無いようだ」というお返事が返ってきた。この1950年代の東西両校舎の増築がいかに大胆な「破壊／保存」行為であったかがわかる。

その後高等学校講堂はさらに「増築」を重ね1980年代の〈七堂伽藍〉の完成へと一気に突き進む。1951年は大学博物館の「修復保存」元年として記憶されるべきかも知れない。

#### 4. 移築について（年表左端にC表示）

大学博物館から少し離れるが、年表作成中に気になったのが創建時の東キャンパスにおける校舎移築の多さである。移築とはつまり「dismantling, removing and reconstruction 建築物を解体または引家により他の場所に移し、復元すること」<sup>11</sup>である。寺社や茶室を筆頭に、移築はとりわけ木造建築の多い日本ではその特質を活かして伝統的に行われてきた建物の再利用法である。解体、移動、復原を要件とする移築の場合、問われるべきは再利用の理由であろう。

---

10 西南学院とヴォーリズは、孤絶し聖別された赤煉瓦講堂（チャペル）を世俗的なコンクリート校舎と直接繋ぐことで、聖俗の融合を試み、キリスト教的な教育理念を実現しようとしたとも考えられる。

11 前掲『建築学用語辞典』。



最初の2つの例は1918年福岡市大名町の旧福岡神学校から西新校地に解体移築された木造の「雨天体操場」と「校舎」である（以下の4例4棟の建築物はいずれも年表の記録写真を参照）。移築した「校舎」（1908年竣工、1911年から福岡パプテスト夜学校校舎）はまず中学部の「寄宿舎」として再利用された。もちろん校舎のままでは使えず、移築に際し改装が施されたに違いない。ところが1923年この「寄宿舎」が再び解体されて隣の中央キャンパス高等学部校地に再移築され、今度は高等学部神学科「仮校舎」及び同「寄宿舎」として再々利用されている（その後1969年解体までの転生に関しては年表1923年を参照）。記録写真を見る限り外壁が木板張りからスタッコ（化粧漆喰）に変わっているものの、正面のペディメント（破風）や窓枠の手の込んだ装飾などはよく残されており、三者は同一性を保っているのがわかる。一方大名町の「雨天体操場」の方は補強工事を施したうえで西新校地に移築（1965年に解体）された。これらの移築にはいずれもヴォーリズ建築事務所が関与している。

3番目の例は1930年にやはり大名町にあった大日本武徳会の木造「武徳殿」（1905年竣工）を西新校地の雨天体操場北東側に移築し、「武道場」として再利用したものだ（1965年に解体）。

4番目は建物丸ごとの移築とは異なるが、建築部材の再利用を意味するスポリア Spolia<sup>12</sup>の例として、1952年干隈校地に建てられた修養会館「山の家」がある。これは前年の本館増築の際、高等学校木造西校舎（1919年竣工）の解体で出た当初材を一部再利用して建造されたものである（1982年に解体）。

確かに解体や運搬の費用は余計にかかるが移築は新築に比べて経費の節減になったのかも知れない。しかしその後の長い「余生」や数々の「転生」を勘案すると、たんに創建時の資金不足による窮余の策であったとは考えにくい。何か別の理由があったはずだ。

学院史資料センターにはM. B. ドージャー（Maude Burke Dozier, 1881-1972）が晩年に西南学院の創建期を回顧した貴重な証言『SEINAN GAKUIN』（未刊行）<sup>13</sup>が残されている。その中から関連のありそうな箇所を抜き出してみた。〔 〕は筆者註、末尾の【 】は原稿にある年代区分。

---

12 戦利品や略奪品を原義とするラテン語。彫刻で飾られた建築部位や美しく磨かれた大理石円柱などを古い建物から剥ぎ取って運び出し、別の建物で再利用すること。西洋では古代末期から新築の一手段として常套化しており、日本でも寺社や茶室などの解体修理や移築の際には伝統的にこの手法が用いられてきた。スポリアには素材的価値に加え歴史的価値や文化的価値などが累積し重層的な意味が生まれる。加藤前掲書、pp. 66-76。

この建物〔1908年竣工の福岡神学校校舎〕は、後に神学校の寄宿舎 dormitory として必要になることを想定して、ほぼ全体が杉材で造られた。教室、図書室、事務室があった。資金不足のため食堂と厨房は省かれた。学習机の代わりに安物の椅子とテーブルが使われた。【1908年】

新しい学校〔1916年2月に設立許可が下りた大名町の私立西南学院〕にはたった2棟の建物しかなかった。以前神学校として使われていた校舎と建設中だった雨天体操場とチャペルを兼ねた建物 a joint gymnasium and chapel の2つだ。【1916年】

新校舎〔西新校地で1917年に着工した木造瓦葺2階建の中学部東校舎〕の工事は遅々として進まなかったが、12月12日には大名町の学校で使われていた家具の一部が新校舎に運び込まれた。12月15日大名町の建物の解体が始まった。4教室の校舎は寄宿舎となり、新しい敷地の裏手〔西新校地北東、年表の1921年配置図参照〕に移築された。雨天体操場は新しい敷地に移築され、補強されて re-built and strengthened、雨天体操場となった。（両建物とも〔この原稿を執筆中の〕1962年に〔中央及び東〕キャンパスで使用されている。）【1917年】

〔中学部の〕新学期は1918年4月9日に第一校舎〔東校舎〕の一部を使って始まった。1918年10月に来日したミッションボードの事務局長は新しい校舎を見て「ドージャーよ、こんな建物はもう建てないように」と言った。安普請の cheaply built 校舎<sup>14</sup>ではあったが、学院の将来に対して懸念を抱いていた人々に安心感を与えたという事実もあった。（……）この校舎に使われた最良の部材 the best material in them が「山の家」という保養所〔1952年竣工の修養会館〕の建設に使われた。この保養所は何千人もの西南学院の学生をはじめ多くの人々

---

13 冒頭に同名のタイトルを持つ A4判 80頁余りの英文タイプ打ちの原稿で、モード自身の手書きの書き込みもある。脱稿は1962年8月頃と推定され、夫妻が来日した1906年から夫ドージャーが休暇帰国する1929年までの西南学院の歴史が、夫の日記やミッションボードに書き送った報告書などをもとに克明に記録されている（ただし完成原稿でないためか記事の一部に年代の齟齬が見られる）。西南メモリアルコラム No.47〔M. B. ドージャーがまとめた『SEINAN GAKUIN』〕（『SEINAN Spirit』No. 202、西南学院大学、2017年9月25日）参照。今回学院史資料センターから全文データの提供を受けた。同センターにはICAによる翻訳があり、拙訳にあたり参考にさせていただいた。記して感謝したい。

の精神的な恵みとなってきた。【1918年】

すなわち彼女の証言から判明したことは1) 神学校「校舎」は最初から「転用」を想定し「寄宿舎」を兼ねていた、2) 「雨天体操場」は「チャペル」を兼ねていた(1921年に講堂ができるまでの代替施設)、3) 大名町にルーツを持つ建物は移築と修復を繰り返しいずれも60年近く学院関係者に愛され続けた、4) 創建当初の部材を継承し再利用した建物は学院関係者に精神的な恵みと安らぎを与え続けた、の4点である。

これらはそのまま最初の問い「再利用の理由」の答えになっていると思う。とりわけ志半ばで閉校となった大名町の福岡バプテスト夜学校初代校長C. K. ドージャーにしてみれば、わずか10年前に建てられた神学校校舎の西新移築はあらかじめ織込み済みであり、悲願でもあったはずだ。

## 5. 転用について(年表左端にD表示)——まとめにかえて

では冒頭の問い、大学博物館改修時のオーセンティシティとは何であったのか? 専門的で技術的な考察は白水氏論文に譲るとして、ここでは最後に転用について考えてみたい。

「修復」Restorationや「保存」Conservationが一般的に建物の当初復原を目指した修繕行為であるのに対し、「転用」Conversionとはもとの建物を新たな用途に再利用するために「改修/改宗」Conversionする修繕行為である。その意味で旧本館・講堂から大学博物館への工事はこの転用に相当する。加藤耕一によれば、既存建物に対して3つの態度があるという<sup>15</sup>。1) 「修復/保存」は文化財であるとの認識から理想的な姿に戻して建物の時間を止めること。2) 「再開発」は破壊と新築(スクラップアンドビルド)で建物の時間をリセットすること。3) 「再利用」は建物を改変しながら新たな目的に転用し建物の時間を前に進めること。

このうち最も新しい態度が19世紀に起源を持つ1) 修復/保存であり、その創始

---

14 同書1917年の箇所、建設予定の東西両校舎に関して次のような記述がある。「[1917年9月に西新校地の]不動産取引が完了すると直ちに、新用地に建設する建物に関し、県にある諸学校の見取り図を参考にしたり、[9月18日には]近江八幡のヴォーリーズ氏に助言を求めたりした。それによると最も安い校舎2棟だけでも\$10,000かかることがわかった。これだけの金額をどうやって集めたらいいのか!」。赤煉瓦本館には「\$12,500」(同書1917年)が必要だったというから、資金調達に苦勞していた当時たしかに東西両校舎建設は安く抑える必要があった。両校舎がヴォーリーズ合名会社(建築事務所)に設計発注されたかどうかは現時点で不明である。

15 加藤前掲書、pp.7-46。

者が冒頭で紹介したヴィオレ＝ル＝デュクに他ならない。2) 再開発は早くも 16 世紀ルネサンスに始まり、3) 再利用（つまり転用）が実は一番古く、スポリアのところでも紹介したように古代末期に遡る。日本の近代以前の「修理」でも、「理想的な姿」とは必ずしもオリジナルを意味するものではなく、むしろ当代最新最良の技術と意匠でもって既存建物を改変し、あるいは転用することのほうが普通であったという<sup>16</sup>（先の 1950 年代の東西両方向への本館増築もこう考えるとすんなり納得できる）。つまり洋の東西を問わず歴史の中で古くから当たり前になり繰り返されてきた転用（再利用）とは、時間建築にとってむしろ本質的な建築行為であったと言える。

1964 年の「ヴェニス憲章」の中で歴史的証言として後世へ伝える義務とされたオーセンティシティ（文化財の真正な価値）は、1994 年の「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」<sup>17</sup>に至り文化と遺産の多様性を尊重する方向へと拡大され、オリジナルとともにその後の変遷をも含む概念へと拡張された。その結果日本の伝統的建造物で実施されてきた古材と新材の交換を伴う「解体修理」や「移築」といった技術においてもオーセンティシティが認められるようになった。つまり 20 世紀末にはコンバージョン（転用）建築においてさえ、その文化的価値と多様性が尊重されていけば、オーセンティシティが許容される時代になったのだ。鉄道駅舎を 19 世紀美術館に「転用」したオルセー美術館（1986 年開館）や火力発電所を現代美術館に「転用」したテート・モダン（2000 年開館）などはその代表例であろう。

こうして見てくると大学博物館改修時のオーセンティシティの問題も自ずと明らかとなる。文化財へのリスペクト、博物館への転用、耐震補強の 3 条件を念頭に行われたという今回の工事は、少なくとも 21 世紀初頭におけるオーセンティシティの基準には合致していたと言えそうだ。何よりも大切なことは、時間建築としての大学博物館は「保存」によって時間を止めるのではなく、「転用」によって時間を前に進めることである。筆者に「巨大なカジユマルの樹根に侵食されたアンコール遺跡」と見えた高等学校講堂は究極の「転用」の姿であったのかも知れない。

何はともあれ、設計図は早くも施工時に修正され、竣工直後から劣化が始まり、改築され、増築され、移築され、改造され、破壊され、修復され、復原され、保存され、

---

16 同書、p. 278-279。また清水重敦『建築保存概念の生成史』中央公論美術出版、2022 年（新装版）、p. 187 も参照。

17 「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」の全文は以下の文化庁サイトで閲覧できる。（2024 年 10 月 1 日確認）[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai\\_isan/pdf/93706201\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/pdf/93706201_01.pdf)

転用され、再解釈されていく時間建築としての大学博物館と東キャンパス建築の歴史／物語を、テキストとイメージを同時参照しながら年表で辿っていただけると幸いである。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、多くの方々から貴重な資料や証言の提供をいただいた。本文記載とも一部重複するがここにお名前を記して感謝の意を表したい。(50音順)

安部健一氏(元西南学院高等学校教諭)、鬼束芽依氏(西南学院大学博物館学芸研究員)、白水達也氏(株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所九州事務所長代理)、世戸口尚英氏(西南学院史資料センター事務室)、松崎尚志氏(西南学院大学教育支援部長)、宮川由衣氏(前西南学院史資料センターアーキビスト)、山縣和彦氏(西南学院史資料センター事務室)

記述には慎重を期したつもりであるが筆者の思い違いなど多々あると思われる。先学諸賢のご叱声を請う次第である。

## 本文・年表凡例

- ・本文・年表記事の出典は原則的に『西南学院七十年史』と『西南学院百年史』に拠り、これを他の資料で補った。
- ・間取り・配置図・記録写真の出典は( )内に略号と該当頁で表記した。
- ・間取り・配置図はすべて原図をトリミングし、一部筆者作製によった。
- ・年表記事左端セルのグレー表示は大学博物館(旧本館・講堂)関係、Aは「間取り」関係、Bは「増築」関係、Cは「移築」関係、Dは「修復・保存・転用」関係、\*は「赤煉瓦建築」関係を示す。
- ・本文・年表記事・間取り・配置図・記録写真の出典略号は以下の通り(50音順)。
  - 40: 西南学院高等学校40周年記念誌編集委員会編『西南学院高等学校開設40周年記念誌』西南学院高等学校、1989年
  - 60: 西南学院大学年史記念アルバム委員会編『西南学院60年のあゆみ』西南学院大学、1978年
  - 70上: 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 上巻』学校法人西南学院、1986年
  - 70下: 西南学院学院史企画委員会編『西南学院七十年史 下巻』学校法人西南学院、1986年
  - 100通: 西南学院百年史編纂委員会編『西南学院百年史 通史編』学校法人西南学院、

2019年

100 資：西南学院百年史編纂委員会編『西南学院百年史 資料編』学校法人西南学院、

2019年

ヴォーリズ 2003：一粒社ヴォーリズ建築事務所編『西南学院旧高校講堂 建物調査  
及び耐震診断報告書』株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、  
2003年

改修報告書 2006：西南学院大学編『福岡市指定有形文化財 西南学院旧本館・講堂  
改修工事報告書』学校法人西南学院、2006年

西南学院一覽 1940：西南學院編『西南學院一覽』財團法人私立西南學院財團、  
1940年

ドージャー 2016：西南学院百年史編纂委員会編『Dozier [ドージャー] 西南学院の  
創立者 C. K. ドージャー夫妻の生涯』学校法人西南学院、2016年

トータルメディア 2006：トータルメディア開発研究所編『西南学院大学博物館(ド  
ージャー記念館) 展示工事 竣工図』株式会社トータルメディ  
ア開発研究所、2006年

福岡博多及郊外地図 1920：大淵善吉編『福岡博多及郊外地図』(帝国都会地図9) 駈々  
堂旅行案内部、1920年

#### 参考文献（上記及び本文引用以外）（50音順）

下園知弥・山本恵梨編『西南学院大学博物館研究叢書 戦争と学院——戦時下を生き  
抜いた福岡のキリスト教主義学校』西南学院大学博物館、2023年

西南学院大学 50周年記念誌編集委員会編『写真 西南学院大学 50年』西南学院大学、  
1999年

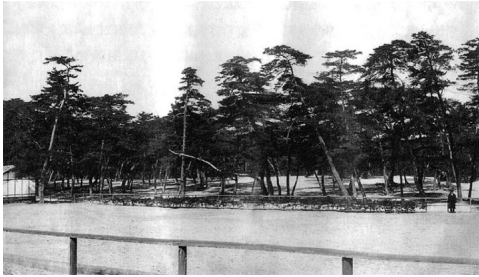
西南学院百年史編纂準備委員会編『西南学院史紀要』Vol. 2、学校法人西南学院、  
2007年

宮川由衣「西南学院のヴォーリズ建築」『西南学院大学博物館研究紀要』Vol. 12、西  
南学院大学博物館、2024年、pp. 79-92

大学博物館及び東キャンパス建築年表

西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024	
<b>前史</b>		
1916年	□ 2月15日：福岡県知事より男子中学校設立許可、福岡市大名町105番地（現福岡市中央区赤坂）の旧福岡神学校跡地に「私立西南学院」設立、設立者は米国南部バプテスト派宣教師 C. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier 1879-1933）	
	□ 4月11日：西南学院開院式	
	□ 11月：「私立西南学院」を「私立中学西南学院」と改称	
1917年	□ 2月：主事であった C. K. ドージャーが第2代院長に就任、学院運営の資金援助をしばしばミッションボードに要請	
	□ 9月：百道松原の海が見える早良郡西新町（現福岡市早良区西新）に校地 19,800m <sup>2</sup> （現東キャンパス南側）購入、学院は米国出身の伝道者・建築家 W. M. ヴォーリス（William Merrell Vorles 1880-1964, 1941 日本国籍取得：一柳米来留 ひとつやなぎ・めれる）と契約を交わし校舎建築に着手、創立期の主要建築物（新築、移築、増築）をはじめその後の学院関係校舎（旧制中学部・高等学部、新制中学校・高等学校・大学）の多くは1955年の干隈校地神学科校舎までヴォーリス建築事務所（近江八幡市、1920年以前はヴォーリス合名会社）に設計発注された（その後しばらく空白期間があり2002年舞鶴幼稚園・早緑子供の園舎からヴォーリス建築事務所への発注が再開）	
	□ 12月：西南学院が福岡市大名町から早良郡西新町に移転、福岡バプテスト夜学校廃止（11月）	
C	1918年	□ 1月：中学部授業開始、木造瓦葺2階建の中学部第一校舎（東校舎）と木造瓦葺スタック塗平屋建の門衛所完成、大名町の旧福岡神学校から木造瓦葺平屋建の雨天体操場及び木造瓦葺2階建の校舎（1908年竣工、1911年から福岡バプテスト夜学校）を移築、校舎は中学部寄宿舎として再利用
		□ 2月18日：中学部9人のキリスト者生徒により自主的な宗教活動サークル「ゲッセマネ会」Gethsemane Band 結成
1919年	□ 4月14日：中学部キャンパス（以後「東キャンパス」「西新校地」とも表記）に木造瓦葺2階建の中学部第二校舎（西校舎）完成	
	□ 12月28日：ミッションボードより本館・講堂建設資金の一部到着	
1920年	□ 5月20日：『福岡市西南学院講堂建築仕様書』（ヴォーリス合名会社）作製（改修報告書2006巻末資料）、『仕様書』は日曜日の作業禁止や工事現場での禁酒禁煙などを規定した「一般ノ約件」にはじまり、基礎工事、煉瓦工事、左官工事などを具体的に指示し、厳格で良質な施工を要求（本文はヴォーリス事務所共通の仕様書形式だが、煉瓦製造には地元の「形状正確ナ博多窯業会社」と特記）	
	□ 5月：高等学部敷地として道路を挟んで西側隣接地（現中央キャンパス東側半分）約19,800m <sup>2</sup> 購入	
	□ 7月15日：「私立中学西南学院」を「中学西南学院」と改称	
D	□ 9月9日：西南学院本館・講堂（現大学博物館）新築工事の定礎式（設計：ヴォーリス合名会社、施工：関組）	
	□ この年、西南学院本館をはじめ高等学部の校舎、C. K. ドージャー邸など創建時の主要建築物の設計図作製（ヴォーリス合名会社）、本館新築工事の隣建設予定地北側隣接部分で元寇防塁発見	
	1921年	□ 2月17日：「財団法人私立西南学院財団」設立許可、併せて中央キャンパスに高等学部（文科、商科）の設置許可
	□ 3月：東キャンパス北側に木造瓦葺2階建の中学部舎監住宅完成	
	□ 4月1日：西南学院高等学部（文科・商科、4年制）設置	

前史



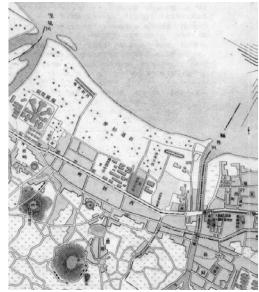
1917年敷地選定当時の西新校地  
右下人物ドージャー（ドージャー 2016 p. 44）



1920年早良郡西新百道松原付近  
（福岡博多及郊外地図 1920）



1917年敷地選定当時の西新校地  
中央人物ドージャー  
（70上 p. 265）



1920年早良郡西新付近  
（福岡博多及郊外地図 1920）



1918年大名町の旧神学校から西  
新校地に移築された雨天体操場  
（ドージャー 2016 p. 45）



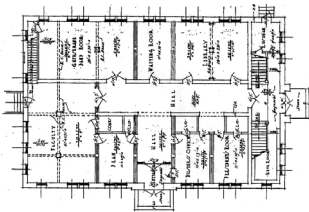
西暦		大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
第1期 1921年～1946年：学院と旧制中部の本館・講堂時代 ― 孤高の赤煉瓦／建学の起点		
A	1921年	<p>□ 3月9日：赤煉瓦造スレート葺3階建の西南学院本館・講堂（ヴォーリス建築事務所図面所蔵）の献堂式、1階は学院・中部の本館（院長室・中部部長室・応接室・教員室・事務室・ゲッセマネ会室等）2階3階は講堂（800人収容）、続いて中部（5年制）の第1回卒業式</p> <p>□ 6月23日：「中学西南学院」を「西南学院中部」と改称</p> <p>□ 8月：中部第2校舎北側に木造トタン葺スタック塗平屋建の物理化学実験室（ヴォーリス建築事務所図面所蔵）完成</p>
	1922年	<p>□ 4月：中央キャンパス南東に木造瓦葺スタック塗2階建の高等学部本館（後の第一校舎）（ヴォーリス建築事務所図面所蔵）完成、学院の所在地早良郡西新町が福岡市に編入</p> <p>□ 6月：東キャンパス南東隅に木造瓦葺スタック塗平屋建の中部部長住宅完成</p> <p>□ 10月：東キャンパス雨天体操場に赤煉瓦造の地下室増設、地下室は教練の銃などを保管する銃器庫としても使用</p>
	1923年	<p>□ 3月1日：東キャンパス北東側の旧寄宿舎を解体、その北側に木造瓦葺スタック塗3階建の中部寄宿舎「百道寮」（ヴォーリス建築事務所図面所蔵）と木造瓦葺平屋建の炊事場完成</p> <p>□ 4月：本館・講堂の北西脇に木造トタン葺平屋建の救護室・雑品庫完成</p>
C		<p>□ 6月1日：解体された中部旧寄宿舎は中央キャンパス高等学部校地に再移築され、木造瓦葺2階建の高等学部神学科仮校舎（後の第二校舎）及び同寄宿舎として再々利用（～1938年まで、1947～1955年は旧制専門学校神学科、続いて新制大学神学科の校舎及び神学寮「カナン寮」として、また神学科が干隈校地移転後は中央キャンパスで宗教センター及び同附属寄宿舎として1969年2月28日の解体まで61年間数々の転生を繰り返す）、神学科開設</p> <p>□ 9月1日：関東大震災</p>
	1924年	<p>□ 12月：中央キャンパス高等学部校地北側への市立西新尋常高等小学校移転に伴う新設道路工事中に元寇防塁発見、高等学校西側通用口の門柱石組・石碑として再利用（1987年アジア太平洋博覧会道路拡幅工事で撤去後、1988年福岡市東区宮崎八幡宮境内に移設）</p>
D	1925年	□ 7月：中部に配属将校就任し軍事教練始まる
	1926年	□ 3月：中部寄宿舎と炊事場の間に洗面所・浴室棟完成
C	1930年	<p>□ 4月1日：福岡市大名町にあった大日本武徳会の武徳殿（1905年竣工）を雨天体操場の北東側に移築し木造瓦葺平屋建（越屋根）の武道場完成、赤煉瓦造の地下室には体操用具などを収納</p> <p>□ 11月30日：東キャンパス運動場北側隣接地約2,966m<sup>2</sup>購入</p>
	1931年	□ 9月18日：柳条湖事件（満州事変）
D		<p>□ この年、「歴史的記念建造物の修復のためのアテネ憲章」（第1回歴史的記念建造物に関する建築家・技術者国際会議）採択、「腐朽や破壊の結果修復が避けられないと見えるときでも、過去の歴史的芸術的作品は、どの時代の様式をも除外せず尊重されねばならない」（第1条）とし、はじめて国際的なルールのもとに文化財の「保存」を訴え、原則的に「修復」の禁止を勧告</p>
D	1933年	<p>□ 5月31日：小倉市でC. K. ドージャー死去（享年54）</p> <p>□ 10月17日：東キャンパス南の道路を挟んで南西角に木造瓦葺平屋建の西南学院バプテスト教会完成</p>
	1934年	□ 10月31日：東キャンパス北東隅「百道寮」裏に、前三方を煉瓦壁で囲い正面に高さ3mの射撃（しゃだ）を設けた狭窄射撃場完成
	1935年	□ 4月1日：中部に商業科（第1種）増設、従来の中学科は第2種
	1936年	□ 4月：中部第一校舎北東側に木造瓦葺2階建の第三校舎（北校舎）完成
		□ 10月22日：理事会「御真影拝載」及び「教育ニ関スル勅語謄本拝載」を文部省に申請

日本館間取り（平面図）

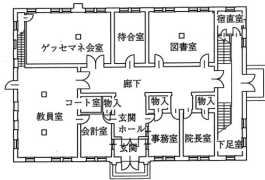
東キャンパス建築配置図

記録写真

第1期 1921年～1946年：学院と旧制中学部の本館・講堂時代——孤高の赤煉瓦／建学の起点



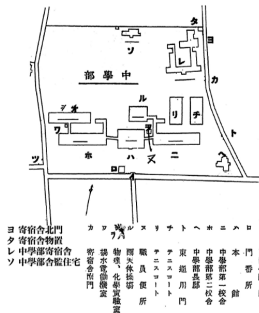
1920年ヴォーリス設計図  
(改修報告書 2006 図面 p. 2)



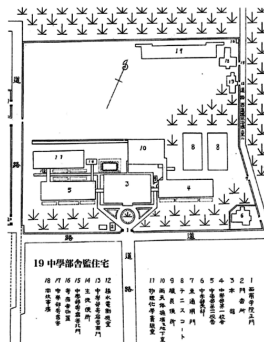
1920年  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-7-1)



1921年頃  
(100通 p. 59)



1921年  
(100資 p. 398、一部筆者加筆)



1925年  
(100資 p. 399、一部筆者加筆)



1908年大名町に竣工した  
福岡神学校  
(ドージャー 2016 p. 33)



1918年大名町の旧神学校校舎を  
西新校地に移築し中学部寄宿舎と  
して再利用  
(ドージャー 2016 p. 45)



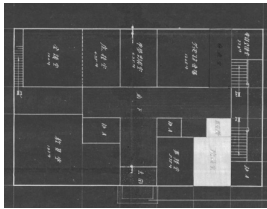
1923年中学部寄宿舎を中央キャン  
パスに再移築し高等学部神学科  
仮校舎として再々利用  
(60 p. 47)

西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
A	1937年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 2月10日：「教育ニ関スル勅語謄本」掲載、本館院長室北側の物入を改造した奉安所に安置</li> <li>□ 4月22日：「御真影」掲載、本館院長室奉安所に安置</li> <li>□ 5月：早良郡田隈村干隈（現福岡市城南区干隈）の土地買収開始</li> <li>□ 7月：干隈校地を敷地に西南学院バプテスト大学構想をヴォーリス建築事務所に依頼し構想図面まで完成するが、国際情勢悪化のため実現せず</li> <li>□ 10月：東キャンパス南西隅に木造瓦葺平屋建の西南会館（学生集会所）完成、高等学部 YMCA や中学部ゲッセマネ会活動のほか学内で唯一の寛ぎの場</li> </ul>
	1938年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ この年、「西南学院防護規定」に「必要に応じ、運動場北側に対空監視哨を配置」の記載あり</li> </ul>
	1939年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 4月1日：西南学院商業学校（夜間課程4年制）開設、校舎は中学部の第一及び第二校舎、武道場、雨天体操場を兼用</li> </ul>
	1940年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 10月30日：中学部物理化学実験室東側に「皇紀二千六百年記念」の国旗掲揚台（御影石製）完成</li> </ul>
*	1942年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 4月1日：東キャンパス西側に赤煉瓦造平屋建地下1階の学院図書館書庫完成</li> <li>□ 10月：赤煉瓦書庫南側に隣接し木造平屋建の学院図書館閲覧室完成</li> </ul>
	1943年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 3月5日：定期理事会総会は奉安殿設置場所を（院長室では生徒の2階講堂への昇降に際し不敬に当たるとして）「校門ノ東松林中」と決定</li> </ul>
	1944年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 3月16日：西南学院商業学校は西南学院工業学校（機械科、採鉱科）へ転換</li> <li>□ 5月：東キャンパス運動場北側隣接地約16,000m<sup>2</sup>購入</li> <li>□ 7月：本館・講堂南東松林の中に神明造の奉安殿完成</li> </ul>
	1945年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 3月4日：本館1階院長室奉安所の御真影を奉安殿へ奉遷</li> <li>□ 6月19日：福岡大空襲で学院構内に投下された焼夷弾数発は不発に終わり学院校舎は無事</li> <li>□ 8月15日：終戦</li> </ul>
	1946年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 1月31日：奉安殿廃止</li> <li>□ 2月16日：西南学院工業学校は西南学院商業学校に再転換</li> <li>□ 2月19日：常任理事会は御真影焼却報告</li> </ul>
	
<p>1925年運動場より見た西南学院全景 左より中学部寄宿舎「百道寮」、同炊事場、中学部舎監住宅、テニスコート、雨天体操場、本館・講堂、生徒便所、西校舎、物理化学実験室（西南学院一覽 1925、40 pp. 10-11）</p>	
	
<p>1936年頃航空写真による中学部・高等学部全景  （左）南東上空から（ヴォーリス 2003 p. 2-1-5-7）  （右）北上空から（60 p. 44）</p>	

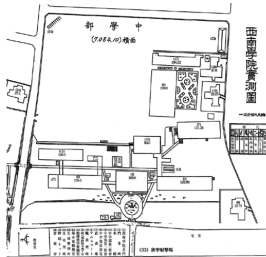
日本館間取り（平面図）

東キャンパス建築配置図

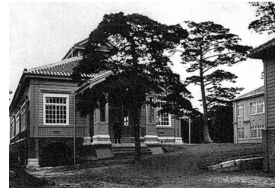
記録写真



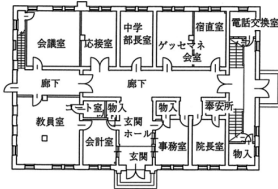
1936年申請図面  
(学院史資料センター)



1935年  
(100資 p. 400、一部筆者加筆)



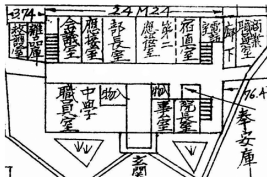
1930年大名町の武徳殿から西新校地に移築された武道場  
(ドージャー 2016 p. 67)



1937年頃  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-7-2)



1939年本館玄関東側事務室  
(100通 p. 665)



1940年  
(西南学院一覽 1940)



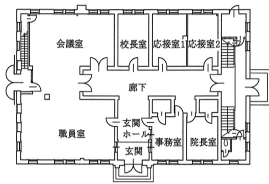
1940年  
(西南学院一覽 1940)



1940年頃本館1階の奉安所に向かって最敬礼をする学院の生徒たち  
(60 p. 6)

西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024	
<b>第2期 1947年～1958年：新制高等学校の本館・講堂時代 ― 分離の開始／西への増築</b>		
1947年	<input type="checkbox"/> 4月1日：学制改革（六三制）により旧制中学部廃止、東キャンパスに新制西南学院中学校（3年制）開設	
	1948年	<input type="checkbox"/> 4月1日：学制改革により旧制中学部校舎を用い新制西南学院高等学校（3年制）開設（旧制中学部4年生・5年生を新制高等学校1年生・2年生で受入れ）、中学校と高等学校は制度的に分離、講堂は高等学校校舎に帰属、旧制商業学校は定時制高等学校（商業科、4年制）として編入
		<input type="checkbox"/> 6月：東キャンパス北東側に新制中学校の木造瓦葺2階建の校舎完成
B	<input type="checkbox"/> 9月1日：中学部の物理化学実験室を木造モルタル塗2階地下1階建に増改築し高等学校「物象館」完成	
*B	<input type="checkbox"/> 10月：東キャンパスの赤煉瓦書庫に2階部分増設	
1949年	<input type="checkbox"/> 2月16日：中央キャンパス及び西キャンパス校地 21,200m <sup>2</sup> 購入	
	<input type="checkbox"/> 3月25日：西キャンパス北西側校地 18,800m <sup>2</sup> 購入	
	<input type="checkbox"/> 4月1日：中央キャンパスに新制西南学院大学学芸学部（神学専攻、英文学専攻、商学専攻）開設	
D	<input type="checkbox"/> この年、前年に起きた法隆寺金堂火災を契機に文化財保護法制定（1897年の古社寺保存法、1929年の国宝保存法などを整理統合）	
A B	1951年	<input type="checkbox"/> 10月：旧中学部木造西校舎が解体され初の鉄筋コンクリート造で3階建の高等学校校舎完成（ヴォーリス建築事務所図面所蔵）、新校舎は本館・講堂の赤煉瓦西外壁の一部を取り壊し2階・3階部分が接続される、本館1階は学院（翌年の移転まで）と高等学校の本館として使用、この工事に併せて本館西側の職員室と会議室を隔てていた廊下の壁が撤去され大部屋となり、この時補強のため（煉瓦壁や煉瓦柱を壊し）鉄骨円柱を新設か
	A	1952年
C		<input type="checkbox"/> 4月1日：新制中学校、中央キャンパス旧高等学部第一校舎（大学1号館完成により空室）に移転
		<input type="checkbox"/> 10月：干隈校地に修養会館「山の家」（第1期工事）完成、建築には前年の高等学校（旧中学部）木造西校舎解体で出た当初材を再利用（1982年修養会館解体）
1953年	<input type="checkbox"/> 3月20日：中学校と高等学校の間で中高一貫教育をめぐる意見対立により教員7人解雇	
1957年	<input type="checkbox"/> この年、大学男子寮「百道寮」（旧中学部寄宿舎）解体	
		
<p>1950年高等学校本館と西校舎 設計図（左）屋根・3階・2階・1階 平面図、 （右上）南・北・西 立面図、（右下）西校舎1階東側エントランス立面図（ヴォーリス建築事務所）</p>		

第2期 1947年～1958年：新制高等学校の本館・講堂時代——分離の開始／西への増築



1951年  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-7-3)



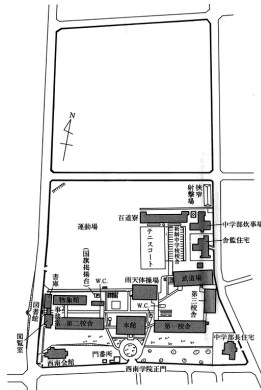
(講堂は二階から移動)



1951年高等学校本館と西校舎  
(70下 pp. 307-308と  
ヴォーリス 2003 p. 2-1-7-3  
から筆者作製)

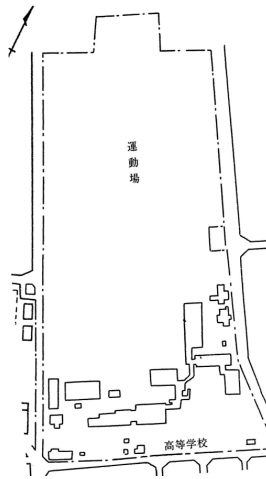


1951年頃診断図  
(学院史資料センター)

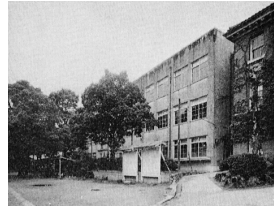


(注) ①は、(新制)中学校校舎  
②は、(旧制)中学校校舎

1948年  
(70下 p. 1181)



1958年  
(100資 p. 405)



1951年竣工の高等学校西校舎  
(左)と本館  
(70下 p. 306)

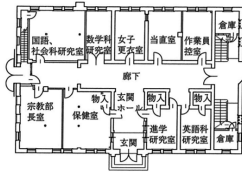


1952年竣工の修養会館（干隈校地）は解体された高等学校木造西校舎の当初材を再利用  
(70下 p. 46)

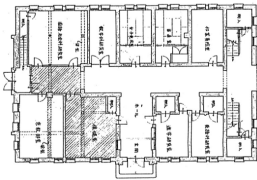


1956年頃スレート葺から瓦葺になった講堂屋根  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-5-9)

西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
<b>第3期 1959年～1983年：新制高等学校の保健室・講堂時代 ― 空位と再生／東への増築</b>	
A B	1959年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□9月：旧中学部木造東校舎が解体され鉄筋コンクリート造3階建の高等学校東校舎完成、新校舎は旧本館・講堂の赤煉瓦東外壁の一部を取り壊し2階・3階部分が接続される、これにより高等学校の西校舎・講堂・東校舎は構造的に一体の建物となる、本館1階にあった校長室や職員室などの管理部門はすべて東校舎1階に移転、一方これまで講堂北西側別棟にあった保健室（救護室）のほか、宗教主任室、体育教員室、ヨルダン社（購買部）が本館1階に入居、この工事に併せて講堂西側大部屋（旧職員室、旧会議）は再度中央廊下や隔壁の新設により3部屋に分割される</li> <li>□この年、高等学校西南門付近に最初の自転車置場完成</li> </ul>
	1961年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□3月31日：定時制高等学校廃止</li> <li>□6月10日：高等学校西校舎西端に鉄筋コンクリート造3階建（一部地下室）を増築し総合理科教室完成</li> </ul>
B	1963年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□10月15日：東キャンパスに鉄筋コンクリート造3階建の中学校本館・南北校舎（南北棟）完成し、中学校が中央キャンパスから戻る</li> </ul>
	1964年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□5月7日：近江八幡市でW. M. ヴォーリス死去（享年83）</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、「ヴェニス憲章」（記念建造物及び遺跡の保全と修復のための国際憲章）採択、「歴史的に重要な記念建造物は、過去からのメッセージを豊かに含んでおり、長期にわたる伝統の生きた証拠として現在に伝えられている。（……）こうした記念建造物の真正な価値 authenticity を完全に守りながら後世に伝えていくことが、われわれの義務」（前文）とされ、はじめて建造物の「オーセンティシティ」（真正性）に言及</li> </ul>
B	1965年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□7月31日：高等学校の体育館（第1体育館は旧武道場、第2体育館は旧雨天体操場）解体</li> <li>□10月：東キャンパス中高グラウンド内の市道路2本と中央キャンパス北東隅大学テニスコート（現西新小学校校地）の土地を交換</li> </ul>
	1966年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□3月19日：高等学校東校舎北側に鉄筋コンクリート造3階建の体育館完成</li> <li>□7月14日：西キャンパス校地17,500㎡購入</li> <li>□9月16日：中学校本館付属平屋棟横の個人邸宅購入</li> </ul>
*	<ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、増え続ける自動車出入りに支障をきたす等の理由で創建時の高等学校赤煉瓦造正門を解体し間口の広いコンクリート造正門に改築、中学校本館中庭に鳥崎記念庭園完成</li> </ul>
B	1968年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□3月：中学校と高等学校の間に南庭園完成</li> <li>□4月30日：高等学校東校舎東端に鉄筋コンクリート造3階建の増築校舎完成</li> </ul>
	1969年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□2月28日：高等学校「物象館」解体</li> <li>□12月20日：中学校本館北側に鉄筋コンクリート造3階建の芸能科特別教室完成、特別教室と本館1階の間に渡り廊下を新設</li> </ul>
B	1971年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□2月1日：高等学校「物象館」跡に鉄筋コンクリート造4階建の「文化館」（部室・図書館・AV/LL・書道・美術・音楽等の各教室）完成、文化館と西校舎の2階及び3階の間に渡り廊下を新設、工事に伴い「物象館」東側にあった「皇紀二千六百年記念」国旗掲揚台を講堂北西脇に移設</li> <li>□4月：高等学校旧図書館閲覧室解体</li> <li>□12月：中学校芸能科特別教室北東側にブロック造平屋建の体育関係部室棟完成</li> </ul>
	1972年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□4月30日：中央キャンパス南東隅に学院本部・大学本館が完成、大学1号館1階本館から本部・本館機能移転</li> </ul>
	1973年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□8月：高等学校講堂雨漏り激化等のため、建物診断調査を大部設計事務所（福岡市西区西新）に依頼</li> </ul>
D	1974年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□8月16日：中学校、旧市道の凹部解消、ブロック塀を直線に修正</li> </ul>



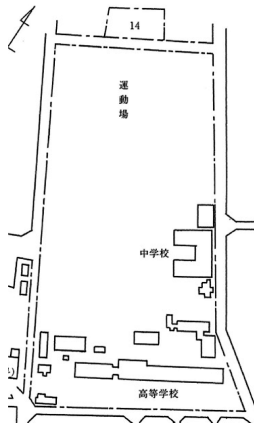
1974年頃  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-8-1)



1979年診断図  
(学院史資料センター)



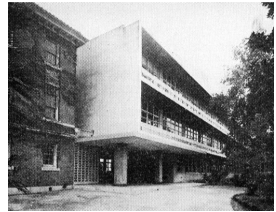
1983年  
(70下 p. 308 から大学博物館作製)



1964年  
(100 資 p. 406)



1950年代 右から高等学校物象館、西校舎、講堂、第2体育館(旧雨天体操場)、後方は解体中の木造東校舎か(100通 p.155)



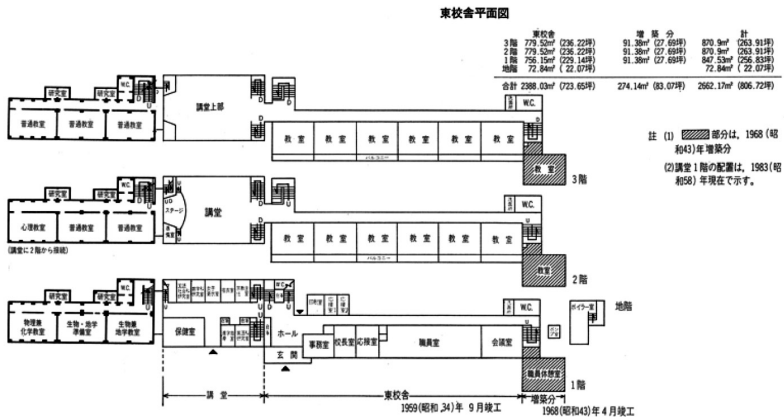
1959年竣工の高等学校東校舎(右)と講堂(70下 p.306)



1966年創建当初の高等学校赤煉瓦造正門は解体されコンクリート造正門に改築(100通 p.484)

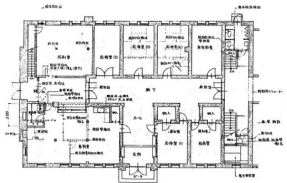


西暦		大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
D	1974年	□ 9月：旧本館・講堂の建物診断調査結果に基づき大部設計事務所が補修工事実施、①雨漏り原因となった煙突3カ所の撤去及び被害修理、②天井裏小屋組みの撓み矯正と補強、③屋根荷重を軽減し、雨水浸透防止のため和型粘土瓦をアスベスト系スレート型に葺き替え、④軒先部分木造飾り修理、⑤軒樋及び立樋修理
	1975年	□ 1月25日：中学校運動場北東側に鉄筋コンクリート造2階建の体育館（ギャロット・ジムネイジウム）完成 □ 3月22日：高等学校東校舎に接続して鉄筋コンクリート造4階建の北校舎（1階食堂）完成、これによって渡り廊下を経由して北校舎、東校舎、講堂、西校舎、文化館が連結され一体の建築物になる □ 8月20日：東キャンパスの西南会館解体
*	1976年	□ 11月15日：高等学校赤煉瓦書庫解体
	1979年	□ 3月：中学校南校舎4階部分増築 □ 6月：先の補修工事から5年経過し狭隘で老朽化した高等学校講堂の解体新築をも選択肢に入れ耐用度について大部設計事務所に再度調査依頼、報告書によれば躯体は極めて堅牢であり「大地震等の天災を蒙らない限りあと50年の耐用も不可能ではない（……）今後とも歴史的遺構として保存するならば現状のまま聊かも構造的改造を加えず、部分的補修を施すにとどめ、従来のまま使用目的に供する他はない」（大部設計事務所『西南学院高等学校中央本館（講堂）建設診断報告書』1979年6月7日）との診断結果を得る
	1980年	□ 2月：干隈校地に鉄筋コンクリート造3階建の高等学校「カナン寮」完成（中央キャンパスにあった旧神学寮の名称を踏襲）
A	1981年	□ 9月：高等学校講堂1階南西隅にあった宗教主任室が北東隅の作業員控室跡に移転し保健室の間取りが2倍近くになる（5ベッド常設） □ 11月30日：高等学校西校舎西側に自転車置場完成
	*D	1982年
	1983年	□ 3月：高等学校講堂玄関東側に1982年度卒業記念事業として校歌石碑（御影石製）完成
*D		□ 9月19日：老朽化した高等学校南側赤煉瓦扉の改築工事完成 □ この年、高等学校施設再検討が行われ東校舎及び西校舎の1階並びに講堂1階の改築工事開始



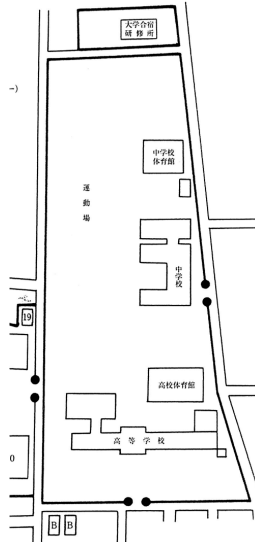
1951年西校舎＋1983年本館＋1959年東校舎＋1968年東校舎増築  
(70下 p. 307 と p. 308 から筆者作製)

日本館間取り（平面図）



1983年改修工事図  
(学院史資料センター)

東キャンパス建築配置図



1980年  
(100頁 p. 407)

記録写真

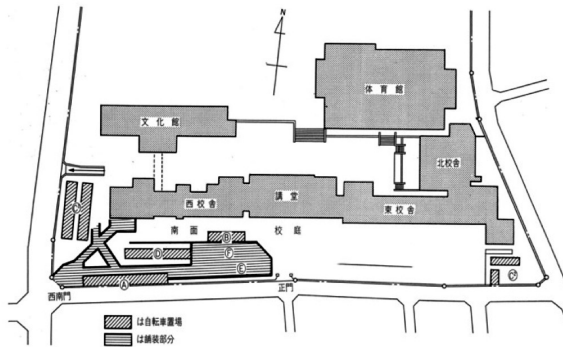


1971年竣工高等学校文化館は南側を渡り廊下で西校舎と接続  
(40 p.38)



1983年老朽化のため解体される前の高等学校南側赤煉瓦塀  
(40 p. 58)

高等学校南面校庭整備図

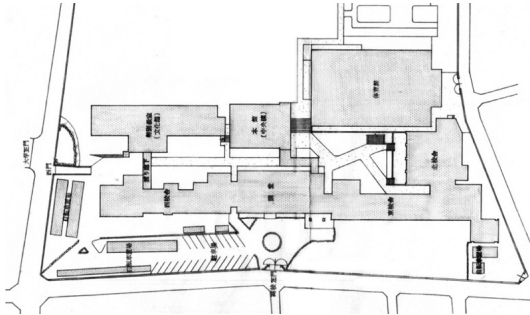


1982年頃高等学校南面校庭整備図  
(70下 p. 357)



1983年高等学校中央棟新設に伴い講堂北西脇の国旗掲揚台をグラウンド北側に再移設  
(40 p.111)

西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
<b>第4期 1984年～2003年：新制高等学校の校長室・講堂時代——帰郷と回遊／〈七堂伽藍〉の完成</b>	
A B	1983年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□12月5日：講堂北側に鉄筋コンクリート造5階建の高等学校本館（中央棟）完成（翌年1月14日献堂式）、これまで東校舎1階と講堂1階にあった本館事務機能（職員室、会議室、保健室など）は新しい本館に移転、講堂には校長室と事務室が戻る、本館2.5階（跡場）と講堂・東校舎2階との間に渡り廊下を新設、また中央棟新築工事に伴い講堂北西脇にあった「皇紀二千六百年記念」国旗掲揚台をグラウンド北側バックネット横に再移設（2010年8月撤去処分）、中央棟の完成で本館、文化館、西校舎、講堂、東校舎、北校舎、体育館が一体となり回遊性のある高等学校〈七堂伽藍〉が完成</li> <li>□この年、高等学校本館工事に併せて講堂1階の改装が行われ校長室・校長応接室・3つの応接室・事務室・印刷室・聖書科研究室配置</li> </ul>
	1984年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□8月：東キャンパス北東隅に木造平屋建の高等学校弓道場完成</li> </ul>
	1985年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□3月：高等学校・中学校の運動場改修工事</li> <li>□4月：大学で博物館学芸員課程開設（開設にあたり大学独自の博物館設置を要求しないという暗黙の諒解）</li> <li>□6月：高等学校講堂の冷暖房設備工事</li> </ul>
	1986年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□1月16日：中学校本館北棟と芸能科特別教室の間に鉄筋コンクリート造3階建の中学校研究室棟完成</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、1900年パリ万博時に開設したオルセー鉄道駅を改装（転用）したオルセー美術館閉館（コンヴァージョン建築）</li> </ul>
	1987年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□1月16日：学院は博多湾西部埋立地（1989年アジア太平洋博覧会会場予定地）の一画約74,000m<sup>2</sup>を新校地（百道浜校地）として購入する売買契約を福岡市と調印</li> <li>□4月：高等学校2階建駐輪場完成、百道海岸埋立による西新通り線（東キャンパス西側道路）拡幅工事で高等学校運動場縮小（1924年記事も参照）</li> </ul>
	1988年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□6月30日：中学校屋外水泳プール（25m×7コース）完成</li> </ul>
	1989年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、高等学校校舎の耐震工事</li> </ul>
	1993年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□10月：高等学校講堂玄関南東側に西南学院商業学校第1回卒業生によって記念碑（御影石製）完成</li> <li>□11月：学院は中学校・高等学校の百道浜校地への全面移転及び移転後の東キャンパスの大学校地帰属を決定、</li> </ul>
	1994年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□4月1日：高等学校は男女共学を実施</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」（世界文化遺産奈良コンファレンス「奈良会議」）採択、異なる風土や文化における多様なオーセンティシティを尊重し、オリジナルとともにその後の変遷をも含むオーセンティシティ概念の拡大、その結果日本の伝統的建造物で実施されてきた古材と新材の交換を伴う「解体修理」や「移築」といった伝統技術においてもオーセンティシティを許容</li> </ul>
	1996年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□4月1日：中学校は男女共学・中高一貫教育を実施</li> </ul>
	1999年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□2月16日：大学干隈校地、福岡市への譲渡決定</li> <li>□4月1日：中学校と高等学校が組織を統合</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>□6月25日：福岡市役所関係部局へ文化財指定や改修工事に関する手続き開始</li> </ul>
D	2000年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、高等学校講堂（旧本館・講堂）が第14回福岡市都市景観賞受賞</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>□この年、1952年創建になるロンドンの火力発電所を現代美術館に改装（転用）したテート・モダン開館（コンヴァージョン建築）</li> </ul>
D	2001年 <ul style="list-style-type: none"> <li>□1月：学院将来計画委員会は移転後の高等学校講堂を「学院の施設として保存し、登録博物館としての機能を持たせる方向」を確認、また学院史やキリスト教関係の資料等の博物館機能とともに大学の学芸員養成教育・実習の教育研究支援の役割を持たせることも提言</li> <li>□4月：大学神学部、干隈校地から西新キャンパスに移転</li> </ul>



1984年頃〈七堂伽藍〉の回遊性が完結した高等学校校舎  
(学院史資料センター)



1980年代 中央キャンパス本部・本館から眺めた高等学校校舎  
左手前から奥に文化館、本館、体育館（一部）  
右手前から西校舎、講堂、東校舎、正面奥に北校舎、  
中央2ヶ所に渡り廊下が見える  
(70下 p.290)



1980年代高等学校講堂校長室  
及び校長応接室  
(40 p. 110)



2003年百道校地移転後の  
高等学校講堂事務室  
(改修報告書 2006 写真 p. 15)

西暦		大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
D	2001年	□ 10月11日：学院将来計画委員会のもとに高等学校講堂利用計画検討委員会が発足し、移転後の講堂の利用法、建物の名称、改修計画等について検討開始
D	2002年	□ 9月14日：高等学校講堂利用計画検討委員会は「現高等学校講堂の利用について（答申）」で、I 利用計画（①博物館として利用、②生涯学習に利用、③施設の多目的活用）、II 博物館構想（①目的：キリスト教文化・教育文化・地域文化及び学院史などに関する資料の調査・研究・保管・展示など、②名称：「西南学院大学博物館」とし通称「ドージャー記念館」、③改修計画：1階を展示室・事務室に、2階はホール・集会所に、3階は長椅子を撤去して常設展示室に利用）等を提言、作業推進のため「博物館設置準備委員会」（仮）の設置を要望
*	2003年	□ 2月：百道浜校地に鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装4階建の中学校・高等学校完成
D		□ 3月31日～6月25日：ヴォーリス建築事務所が旧高等学校講堂の建物調査及び耐震診断を実施（ヴォーリス2003）
		□ 4月1日：中学校・高等学校、西新校地から百道浜校地新校舎に移転

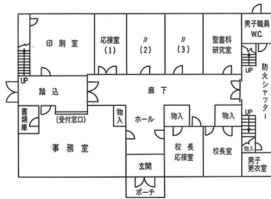


2003年改修工事直前（左）正門と本館・講堂南面の外観  
（右）2階講堂内観（上：西面、下：東面）（ヴォーリス2003 n. p.）

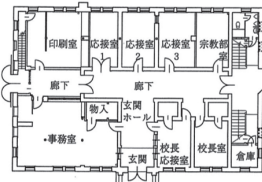
第5期 2004年～現在(2024年)：大学博物館(ドージャー記念館)時代 —— 保存から転用へ/赤煉瓦の簇生

D	2004年	□ 3月11日：「西南学院旧本館・講堂」福岡市指定有形文化財に指定、4月1日「保存建築物」に指定
D		□ 3月31日：読売新聞社西部本社ビル南側公開空地（福岡市中央区赤坂1丁目）に「西南学院発祥の地」を示す記念碑完成
*		□ 3月：旧本館・講堂北東側に鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装4階建の法科大学院棟完成
		□ 4月16日：高等学校講堂利用計画検討委員会答申を受け第1回大学博物館設置準備委員会開催
D		□ 8月9日：旧本館・講堂（大学博物館）の補強改修工事着工（設計監理：一粒社ヴォーリス建築事務所、施工：松井建設）
*		□ 9月：旧本館・講堂西側に鉄筋コンクリート・鉄骨鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装2階建の西南クロスプラザ（大学厚生棟）完成
	2005年	□ 3月20日：福岡西方沖地震発生 M7.0（西新地区：震度6弱）、煉瓦部の筋交い補強及び小屋組部分の水平補強を8割程度終えていたため、立地基盤の状況・揺れの方向性なども幸いし、構造部に致命的な損壊なし
*		□ 3月：旧本館・講堂北西側に鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装4階建の大学院棟完成
		□ 4月20日：余震発生 M5.8（西新地区：震度5弱）、補強工事も進捗し軽微な損壊のみ

日本館間取り（平面図）

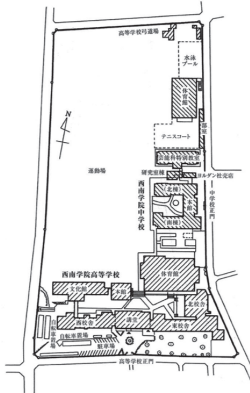


1984年  
(70下 p. 362)



2003年  
(ヴォーリス 2003 p. 2-1-8-2)

東キャンパス建築配置図



2003年  
(100頁 p. 403)

記録写真

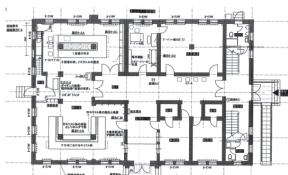


2003年改修前の旧本館・講堂  
西壁開口部をセメントで封印  
(改修報告書 2006 写真 p. 4)



2003年改修前の旧本館・講堂  
東壁開口部をセメントで封印  
(改修報告書 2006 写真 p. 3)

第5期 2004年～現在(2024年)：大学博物館(ドージャー記念館)時代——保存から転用へ／赤煉瓦の簇生




2004年展示配置図  
(トータルメディア 2006 p. D01)



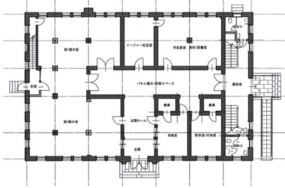
2018年 (100頁 p. 395)



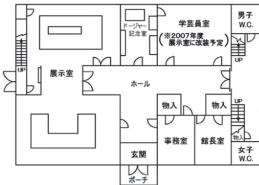
2004年11月改修工事中の旧本館・講堂 右後方には法科大学院棟と工事中の大学院、左後方にはクロスプラザが見える(筆者撮影)

		西暦	大学博物館及び東キャンパス建築年表 1916-2024
A C D	2005年		□7月21日：旧本館・講堂（大学博物館）の補強改修工完了（竣工）、修復後の構造は「煉瓦造（各階床及び小屋組は木造）、玄昌石（雄勝石）天然スレート葺、3階建、寄棟造」、改修工事基本方針は「歴史的建造物の保存改修にあたっては、建物の歴史的価値を尊重することが基本であり、建築自体の耐久性・機能性だけでなく、歴史的・文化的価値について事前に十分な認識をもった上で、価値を損なうことのない工事の実施が望まれる。（……）本建物も建設されてから長い年月を経ており、その間に何度も改築が重ねられ、新材に置き換えられている部分や他の仕上げ材で上張りされている部分、また使用勝手上新たに間仕切りを設けている箇所等がある。できるだけオリジナルの状態に復元することを原則とするが、現在良好な状態に保たれている部位は現状維持とした。また、今後博物館として使用されるため、その用途に対応できる機能も考慮した計画とした。」（改修報告書2006 p.51）、1階展示室改装のほか、創建時にあった煙突3本（南面2本、北面1本）をシンボルとして復元、講堂3階から撤去された木製長椅子は修復され中学校・高等学校校舎廊下に移設、また長椅子の当初材を用いて中高チャペルの十字架を作成
		2006年	□3月：大学博物館開館記念展示展示工事竣工 □4月1日：建物名称「西南学院大学博物館」に変更 □5月13日：西南学院大学博物館（ドージャー記念館）開館
*	2007年		□3月：大学博物館東側に鉄骨鉄筋コンクリート・鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装2階建の西南コミュニティーセンター（学外連携施設）完成 □3月：大学博物館2階講堂にパイプオルガン設置
A			□4月：大学博物館1階北東隅の学芸員室を展示室へ改装、学芸員室は館長室に移動
*	2008年		□4月：中央キャンパスに鉄骨鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装2階建の大学チャペル完成 □5月：大学博物館西脇に宣教師記念碑（黒御影石製）完成
	2009年		□10月：福岡市西区田尻に大学総合グラウンド田尻グリーンフィールド完成 □この年度より、大学博物館学芸員課程履修の実習生を受け入れ博物館実習の授業開始
*	2010年		□1月：百道浜校地に鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装3階建の小学校完成
*	2012年		□3月：中央キャンパスに鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装4階建の言語教育センター棟完成
*	2014年		□2月：東キャンパス中央西側に鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装4階建の西南学院本館完成、中央キャンパス本館から機能移転
D	2015年		□3月17日：「西南学院大学博物館（ドージャー記念館）」福岡県指定有形文化財（建造物）に指定
*	2016年		□3月：東キャンパス中央東側に鉄筋コンクリート・鉄骨造赤煉瓦外装3階建の西南学院百年館（松緑館）完成 □5月13日：大学博物館常設展示室リニューアルオープン
*			□9月：中央キャンパスに鉄骨造赤煉瓦外装7階建の大学図書館完成
*	2023年		□6月：西キャンパスに鉄筋コンクリート造赤煉瓦外装3階建の体育館（ジムナシオン）完成
	2024年		□1月に発生した能登半島地震（M7.6）を契機に大学博物館講堂（2・3階）への立入が制限され、建物の耐震対策や仮移転先の検討が本格化
			
		<p>2024年9月 左から法科大学院棟、 大学博物館、大学院棟 （筆者撮影）</p>	

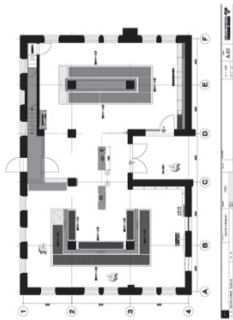
日本館間取り（平面図）



2006年  
(改修報告書 2006 図面 p. 12)



2006年  
(トータルメディア 2006 から  
大学博物館作製)



現行常設展示室配置図  
(大学博物館)



現行ドージャー記念室(左)と  
特別展示室(右)配置図  
(大学博物館)

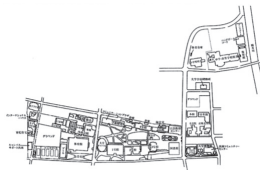
東キャンパス建築配置図



2004年11月改修工事中の  
屋根裏小屋組(筆者撮影)



2004年12月改修工事中の  
解体当初材(筆者撮影)



2018年西新校地・百道浜校地  
(100資 p. 394)

記録写真



2004年11月改修工事中の  
旧本館1階(筆者撮影)



2004年12月改修工事中の  
講堂2階(筆者撮影)



2004年11月改修工事中の  
講堂3階(筆者撮影)